

文学に表われた横浜

立見政志（鶴見工業高等学校事務長）

一 古い小説家達から谷崎まで

横浜市は多くの文人にとって魅力ある地だったらしく、横浜に住み、あるいは、自らの作品の舞台を横浜に設定した文人は枚挙にいとまがない。東京に近く、また湘南に続く地だけに交通の便もよく、さらに、文明開化以来、多くの外国人が住み、その異国情緒溢れる街並は多くの小説家たちの創作意欲をそそったことだろう。その当時の横浜では、東京ではめつたに見られないような奇麗な食堂や寢室があるハイカラな西洋館があり、谷崎潤一郎は横浜在住の経験から「痴人の愛」を書いた。異国趣味に耽溺した氏の名作が、舞台が横浜になったところで完結するのは印象深いことである。

尾崎紅葉「金色夜叉」、徳田秋声「足迹」、木下尚江「労働」「墓場」「火の柱」、小泉八雲「日本警見」「東の国から」、島崎藤村「雑貨店」「土産」、志賀直哉「無邪気な若い法学士」、坪内逍遙「当世書生気質」、永井荷風「あめりか物語」「ふらんす物語」、夏目漱石「門」、森鷗外「棧橋」「舞姫」等が挙げられる。更につけ加えれば、佐藤春夫の「田園の憂鬱」、この田園は都筑郡中里村のことであるが、現在は緑区になる。真山青果は生麦事件を扱った「償金五十万弗」、幕末史劇「聞多と俊輔」の二劇作を書き、葛西善蔵は鶴見花香園で「暗い部屋にて」を書いた。

二 現代作家が描く横浜

大仏次郎の作品では「白い姉」「ふらんす人形」「霧笛」「夜の真珠」「帰郷」等があり、小栗風葉「初一念」、岸田国士「由利旗江」、有島武郎「或る女」、石川淳「黄金伝説」、上田敏「うずまき」、

中編小説「蟻の塔」で知られる山田彦は現在横浜在住の作家で、舞台が横浜と思われる短編を多く書いている。「南京街」の主人公の母親が歌舞伎と中華料理が大好きで、一カ月に一度ずつ歌舞伎

座に行った帰りに、南京街に足をのぼすことにしている。

母親は中華料理についてはなかなかのうき型で、健啖家で、桜木町で主人公と待ち合せて行く店はいつも決っており、その店が休みだったり、混んでいたりすると、南京街で覚えたというより言いがたない言葉で毒つきはじめた。

斎藤栄は横浜が生んだ推理作家で、大仏次郎等と同様、横浜という街を愛し、熟知しているためか、作品のなかでしばしば横浜を舞台にしている。「徒然草殺人事件」はストーリーの中心に水道公害問題を据え、徒然草の著者、吉田兼好法師忍者説を採り入れて、読者の歴史的興味を刺激しながら、犯人の意外性という推理小説の醍醐味を満足させる。第一の殺人の被害者が鶴ヶ峯浄水場で発見されたり、紅葉坂附近の公的な結婚式場の責任者（徒然草の研究家でもある）を登場させて事件に絡ませ、しかも、横浜市の係長試験制度がこのミステリーの勘所となっているところは、氏が長年にわたつ

て本市の職員だったことと無縁ではなからう。

他に江戸川乱歩賞を受けた「殺人の棋譜」、さらに「真夜中の意匠」「奥の細道殺人事件」や、埋立地に対する補償に絡む抗争を扱った「機密」、主人公が本市の係長である「愛と血の炎」等がある。先に挙げた公害問題を扱った作品に「危険な水系」がある。ここでも氏は作家の眼をとうして、大都市横浜の苦悩を訴えている。

数年前に港北区に在住した五木寛之はヒッチコックばりの鳩の暴力を扱った作品「鳩を撃つ」を書き、「凍河」「海を見ていたジョニー」等をものにした。

「凍河」は新横浜駅近くの精神病院が舞台であり、まだ若い青年医師が主人公である。病院長以下、全従業員の基本給が十万円以下で、入院患者を積極的に地域の問題や市民運動に参加させてゆこうとする。病院長の患者に対する良心的な姿勢は経営面にも現われ、病院は赤字を抱え、倒産寸前である。戦時中、大陸で

七三一部隊に属し、細菌兵器の研究に従事したことがあり、その贖罪のために、現在の社会奉仕的な医療に従事して良心の傷跡を癒している。

(新幹線の駅の付近とはいえ、そのあたり一帯は、まだどことなくひなびた感じで、畠や、雑木林や、古い農家の納屋らしきものもいくつか残っている。横浜の市内にこんな場所があるとは、ぼくには意外だった)

非営利的な経営をつらぬき、最後に経済的に行き詰り、病院を不動産会社に売り払うはめにおちいるのだが、周囲の住民が、自分たちが住む街に精神病院なんかあるよりは、近代的なマンションでも建ててくれた方が自分たち、延いては、街の利益になると思つていてということ、病院長が実感し、(犠牲と奉仕の精神が大切なのは言うまでもないことだが、それを政治や社会のゆがみの安全弁として強制することは間違っている)という考えに、諦念と、敗北感を抱くわけだが、このことは(不幸でもなければ、幸福でもない)現代の若者の思考の埒外のことだろうか。

「海を見ていたジョニー」は「凍河」以上に港ヨコハマの異国情緒を濃厚に描いている好短編である。

山下公園近くには外人が入り出すバ

台になっている。主人公のジュンイチは大好きな姉由紀の経営するバーで働くジャズバンドの少年で、バーが閉まる深夜、公園と海との間にある遊歩道にやってくる。遊歩道の端から(数メートル下に、黒く揺れ動く水面があって、その水面に接して、せまい四角な石畳が波に洗われていた。遊歩道から石段を降りてそこへ行ける)

(この遊歩道には、いくつかさんな場所があり、人目につかず、どんな音を立てても誰からも文句を言われる気遣いもない)海水のピタピタと鳴る吹きに潮風。貨物船やタンカーのシルエツト。闇を縫って響くジュンイチの吹く安物のトランペットの音色。ジュンイチはアーチストになるのが夢だ。そんな少年にぐうたら

な白人の青年と同棲している姉の由紀は批判的だ。「あなた、自分に才能があるとも思っているみたいだわ……」その年になって、女の子よりもジャズに夢中というのは、何だかおかしいわ。セックスなんかには興味ないって顔をして、淳一、あなた少し変なんじゃない?、それでもジュンイチは平気だ。幼い頃に母親を失い、五年前に、税関吏だった父親が精神病院に入院して、仲間から(気違っ子)とのしられてもあまり気にしない。

いつもと同じように、ある夜更、石段

を降りて練習をしていると、頭の上で(ブラボー)という声が出て、黒い大きな影が、手を叩きながらゆっくり階段を降りてくる。その時が、アメリカの黒人兵、ジョニーとジュンイチの出会いだった。ジュンイチはジャズメンだったジョニーからいろいろ教わる。

あの界限の港町特有の雰囲気や背景にして、ヴェトナムの戦場で精神的に深く傷をおったジョニーとジュンイチの友情。ジョニーの由紀への諦めの感情が入り混った思慕。バーのなかで古いピアノが奏でる清冽で哀愁に満ちたジャズのリズム。(「音楽は人間だ。わたしが駄目

な人間になる。すると、音楽が駄目になる。わたしが高まると、演奏が高まってくる。……音楽はごまかせない。人間の内面を映す鏡みたいなもんさ)……「ジョニー、あなた、おれの姉の由紀に惚れてるだらう)……「あなたのピアノはそう言ってるぜ。音楽はごまかせないもんだよ)」、ジョニーはジュンイチに隠さず言う。(「彼女は素晴らしい人だ)。

姉の由紀は自分へのジョニーの思いに気づいているのか殊さらに冷い。再びヴェトナムに行ったジョニーのことを(どうせ帰るときはしないわよ。ヴェトナムじゃ黒人兵を先頭に立てて戦争してるって噂だから)と言ってジュンイチを傷つけ、少年は大好きな姉を生まれてはじ

めて、酷く撲った。やがてジョニーはまた戦死せず帰ってきた。古いピアノでブルースを弾き言った。

(「ジャズは人間だ。良い人間だけが、他人を感動させるピアノを弾ける……)」「わたしは半年以上も戦争をやってきた。そこでわたしは駄目になった。駄目にならなければ、戦争なんかやれない。罪のない人間を殺せない奴は生きて帰れない……)」

山下公園のあたりを夜遅く通れば、近くの酒場から古いピアノが奏でるブルースの調べが聞えてくるような気がする。

三 戦時下の横浜を描く

郷静子の「れくいえむ」は太平洋戦争時の横浜の置かれた状況と戦争の悲惨さを描いた作品である。一人の軍国少女を主人公に、戦争と死のかかり合いを中心に、重厚な表現の内から湧き出てくる横浜の悲劇的運命を、戦争体験をもたない読者でも感動をもって知ることができ

る。(「吉田さんと仲良くしない方がいいことよ。吉田さんには風があるのよ)と同じ女学校で学ぶ農家の娘は告げ口されるが、それがいざ戦時になると、主人公は、朝礼で前に並んでいる以前農家の娘を告げ口した級友のおさげ髪の毛の間

を風が出たり入ったりするのを見るのだ。彼女は農家の娘であるが故に、級友達は彼女をたくみに避けていたが、それが戦時では立場は変わる。彼女は毎日白米の弁当を持ってきたり、時には、教師や工場の上司に新鮮な生卵を贈ったりして感謝される。戦争が激しくなると、主人公の周囲の人達は徹底的に死んでゆく。まさに（死が頭の上から雨のように降りそそぐ時代であった）。少女と関わり合いのある人達は様々であるが、特に、軍国主義が鼓舞された戦時での平和主義者及びその家族の置かれた状況も読者は克明に知ることが出来る。さらに、空襲があるたびに防空壕を求めて逃げまどう市民の姿に、戦争の悲惨さと平和が内包する重みを認識せざるをえない。

東京は空襲でやられたのに、横浜市は被害はなかった。アメリカには横浜はゆかりの深い土地だから、空襲をしないという噂があったが、それは噂に過ぎなかった。空襲の被害は壊滅的であり、市街地に集中しており、避難してくる罹災者の様子は惨憺たる様相を示し始めた。さまざまなものの焼けこげる異様な匂いが

立ち籠め、焼け崩れた家屋は風に赤い炎を捲き上げる。道に頭の白い老婆の屍体がある。

青木橋から見渡すと、眼下に荒廃した街が広がっていた。おびたらしい家屋、おびたらしい人々の生命、わずか半日で失われたそれぞれの暮らし。黄金町や日ノ出町の死人の山。工場の社長が学徒隊解散式にのぞみ（……我等の努力足らずして、無条件降伏という有史以来の汚辱にまみれるに至ったことを、畏れ多くも天皇陛下に對し奉り、諸君と共に深く地に伏してお詫び申し上げ次第であります）と訓示すると、（私は天皇陛下にお詫びすることは何もありません。私は申しわけないことなどしておりません。どうして無条件降伏などするのですか。本土決戦をするのではなかったのですか。一億玉碎するまで戦うのではなかったのですか）と抗議して皆の前で失神する。

郷静子は鶴見高女の出身であり、本市在住の作家である。身をもって体験した事実をもとに書いたと思われるこの作品は、文字どおり「死者のためのミサ曲」である。

関東学院の教官である岡松和夫の近作「深く目覚めよ」は裁判に興味のある若い青年教師と恋人とのどろどろとした関係を、精神病院に入院している恋人の母親や自殺した弟を背景に、暗いイメージが投影されている作品である。

「冬の陽は」戦時のミッションスクールの出来事、つまりヨハネ伝の一節と軍国主義を導入部とする作品で、両親を日本人に殺された米人が米本土の日本人収容所で献身的な奉仕活動をしたり、蕃地に赴いた長男がまず殺され、それを知って、ついで赴任した次男が殺されて、最後に出かけた三男が、心服させるという逸話をただ単にキリスト教式仇討と理解すればよいのである。宗教家の精神の内奥はあまりにも深淵で複雑ではないか。以上の作品はいずれも横浜が舞台になっている。

四 ちむすび

本稿では特に既に他の書物でくわしく論じられている作品を避け、現代作家に焦点をしばった。小説家はその作品の舞

台がある一定の地に決めるにあたって、必然的な理由、ないし根拠があると考えるのは常識的なことだが、作品が書かれる以前に、小説家は自己の創作上の内的葛藤の一つの処理のために居を定める傾向があるから、居を定めようと決意し、あるいは、居を定めた時点より既に作品の舞台は設定されつつあると考えられる。

このことは「痴人の愛」のような顕著な例ばかりではない。作者のその地への本能的と言ってよいほどの愛着心が、舞台を決め、登場人物の性格から、作品に深く沈潜し内包される美意識ないし思想をも左右すると言っても過言ではない。

ナオミという美少女と紫の上は感覚的には重ならないまでも、彼女の日本人はなれた姿態と性情及びその行動は、当時の東京ではなく、横浜の方が安住の地としてふさわしいのだ。読者にとって、作品のなかで郷土がどのように表現されているか興味あることであり、副次的であっても、小説を読むうえでその楽しみの一つであると言えよう。